けいじゅヘルスケアシステム業績集（2014）の発行にあたって

2014年度は、富岡町事業を中心とした80周年記念事業の終結を見る年となった。6月までに恵寿総合病院の5 病棟5 階の改修工事と1, 2病棟解体工事を終えた。そして、新生5病棟5階は7月1 日より県内初の地域包括ケア病棟となった。また、2病棟解体部分は、徳充会が取得し、高齢者複合施設・ローレルハイツ恵寿を建設し、年度内の2015年2月末に完成を見た。

6年間に及ぶ立体駐車場整備、恵寿総合病院本館新築・既存棟改修事業、高齢者複合施設建築の間、診療環境の低下、病床稼働の低下を余儀なくされた中で、法人の経営を支えてくれた多くの職員に感謝する。また、この一体的な整備に多くの知恵を貸してくれた三菱商事、IHI、伊藤喜三郎建築研究所、竹中工務店、松井建設などのパートナーにも感謝したい。そして、何よりも、次の世代のけいじゅヘルスケアシステムの発展の礎をこの時期に築くことができたことを喜びたい。

恵寿金沢病院は、7月1日、NTT 西日本よりの事業譲渡によって誕生した。7対1入院基本料89床の病院であり、すべての診療科と体制は存続し、141名の医師、看護師、コメディカルスタッフなどはそのまま円満に転籍となった。また、年度初めに中能登町に法人として3番目となる小規模多機能型居宅介護事業所・恵寿みおやを開設、12月には介護老人福祉施設エレガンテなぎの浦増床、そして3月には先に触れた高齢者複合施設ローレルハイツ恵寿を開設した。

恵寿フィロソフィーは、このような事業拡大の中で、2013年度末の職員数1,445名（董仙会1,072名、徳充会373名）に対して2014年度末には1,645名（董仙会1,255名、徳充会390名）となり、新たな恵寿の仲間となる職員と価値観を共有する目的で、3部構成からなる行動規範として策定し、職員に周知した。さらに2015年初に、これをクレドとして職員に配布した。

診療報酬改定は、2014年4月に行われた。急性期病床削減のために、数々の施策が盛り込まれると同時に、急性期病床から回復期病床、療養病床、老人保健施設に在宅復帰率の縛りが導入され、国の病院・施設から在宅へといった方針が先鋭化した。また、この改定で誕生した地域包括ケア病床を恵寿総合病院、恵寿金沢病院に開設した。特に恵寿総合病院では、この病床を急性期後の亜急性期患者ばかりではなく、在宅患者を支援する役割で運用し、高い稼働率を得ることができた。

地域包括ケアシステムの確立は介護ばかりではなく医療へも求められてきた。これまで、われわれがけいじゅヘルスケアシステムとして、地域で展開してきた医療介護福祉を統合した施設集積、全施設のオンラインコンピュータシステムによる患者・利用者情報の一元化、コールセンターによるヒューマンインタフェイス、在宅総合サービスセンターによるケアマネージの一元化、そして在宅支援病棟としての地域包括ケア病棟などの整備が『恵寿式地域包括ケアシステム』として花開く準備を整えることができた。

業績集（2014）は、2014年度の取り組みの一部である。診療実績は能登中部のみならず、能登北部の医療を守る役割の一端を担えたと思う。また、専従の広報課の新設により情報発信の機会も増加した。さらに、現場の実践、研究、学術面では、正直、理事長の論文や取材記事が多かったこれまでとは一変した。各現場から質の高い研究発表、事例発表、論文発表が増加した。これは、2014年4月に赴任いただいた前金沢大学医学部長の山本 健病院長の薫陶によるものも大きい。

2015年は団塊の世代が後期高齢者となり、数々の社会問題が浮き彫りになる2025年まで10年となる。地域医療構想をはじめとして、国の新たな施策も目白押しである。その中で、政策や社会の変化にすばやく変態できる組織が求められる。現場力とともに、学究的な力を持った若手の台頭はうれしい限りである。

2015年6月吉日

社会医療法人財団 董仙会

社会福祉法人 徳充会

理事長　**神野　正博**